

令和 6 年 6 月 15 日現在

機関番号：32421

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K01042

研究課題名（和文）西インド奴隷の人口問題と人口政策

研究課題名（英文）The political economy of slave reproduction in the British West Indies

研究代表者

伊藤 栄晃（Ito, Hideaki）

埼玉学園大学・人間学部・教授

研究者番号：60213071

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：18世紀末の西インド諸島ネイヴィス島の奴隷制砂糖プランテーション「モントラヴァーズ農園」史料の分析に注力した。この農園はプリストル出身の商人ビニー家が所有しその史料はプリストル大学附属人文・社会科学図書館に蔵されている。そこでは黒人奴隷の出生・死亡・移動の記録「奴隷登録簿」および日々の業務日誌である「プランテーション業務日録」との資料連結が可能である。分析の結果、サトウキビ刈入れと製糖が行われる冬春期よりもサトウキビ作付けが行われる秋期のほうが過酷な労働動員がされていること、奴隷の出生行動の秋期の低下は、通常は非農場仕事に従事するグループのほうがより顕著であることを明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

18・19世紀西インド諸島の奴隷社会における低出生と高死亡率問題は、人口学と人口政策の歴史的起源に深く関連している。本研究は、低出生の要因として過酷な労働条件が挙げられることをサトウキビ農園の季節的な業務スケジュールと彼らの出生記録との史料連結で確認すると同時に、奴隷の出生の季節的な変動が、日ごろは非農場仕事に従事し繁忙期にサトウキビ作付けに動員されたグループにおいて特に顕著であることを発見し、過酷な労働条件に慣れない集団ほど屈辱感が大きく出生数の低下を招きやすいと推論する。これが本研究の学術的な意義である。また社会的意義は、低出生と労働条件との関連をより深く議論する機縁になる点が挙げられる。

研究成果の概要（英文）：This research project focus on the behavior of female slaves on the production and reproduction in the 18th and 19th centuries British West Indies. The analysis suggests that coupling among slaves declined in autumn and increased in summer, which means they hesitated coupling in the busy seasons.

研究分野：西洋経済史

キーワード：プランテーション イギリス帝国 黒人奴隷 ジェンダー 人口 人口政策

1. 研究開始当初の背景

近世英領西インド諸島の奴隷社会の人口研究は、同期の大西洋奴隷貿易のそれとともに 1960 年代より本格化し、今日ではマクロレベルでの奴隷の低出生と高死亡の事情についてのデータの精度は、非常に高まっている。今日では調査研究の方向は、時期的、地域的あるいはプランテーションごとの奴隷人口の個別研究の掘り下げに向かいつつある。とくに 18 世紀後期から 19 世紀前期は、プランテーションごとの奴隷人口データが処々で作成された時期であった。

この時期は、大西洋世界分業体制の要石の一つだった北米植民地の独立・離脱、奴隷価格の高騰、スペイン領キューバなどの砂糖生産への参入に伴う砂糖価格の下落に加えて、本国や北米での奴隷貿易・奴隷制廃止運動 (Abolitionism アボリショニズム) の国民的盛り上がり、そして次第に大規模化する黒人奴隷反乱の続発などの諸困難に直面し、英領西インド諸島の奴隷制砂糖プランテーション経済と白人少数支配体制であるプラントクラシーは、世紀半ばの解体に向けて進んだ危機的時期である。この時期にプランターの多くは奴隷人口の保全に努めざるを得なくなり、そのため奴隷の人口データづくりが盛んに行われた。それらが今日その殷賑ぶりを誇る近世カリブ沿海地域の奴隷人口・社会構造研究を支えている。

プランテーション奴隷の人口動態は、出生と死亡との両面において、その労働条件によって大きく異なることはこれまで様々議論されてきた。とくにプランテーション業務は、サトウキビ栽培の季節的なローテーションに従ってその過酷度も季節的に変動することは論者によって推論されてきたが、日々の業務実態と結び付けた議論は、資料的な制約が大きいこともあってまだ調査研究の余地は大きい。以上が本研究の開始当初の学術的背景である。

2. 研究の目的

本研究は、大きく 2 つの課題から出発している。まず個々のプランテーションに即して、その年間業務の流れと奴隷社会における出生と死亡の推移との連関を綿密に分析すること。第 2 にデータを作成したプランターが、「廃止」論者との論争に直面しつつ、それらのデータを用いて奴隷人口の再生産 (リプロダクション) とプランテーションの生産 (プロダクション) 活動のためにどのような対策を考え試行していたかを、やはり個別農園ごとに明らかにすることである。

第 1 の課題に取り組むためには、プランテーションの日々の業務日誌に当たる記録と奴隷の出生・死亡・移動が逐次記録された人口資料とが、同じ時期に利用可能であるような農園を見出す必要がある。筆者はこれまで主にジャマイカの比較的大きなプランテーションを中心にこれら二種の資料の連結調査が可能なる事例を探してきた。それは、18 世紀以降英領ジャマイカがフランス領サンドマングとともに西インドの熱帯産物生産の中心となっており、最も先進的で典型的なプランテーション経済社会を現出していたためである。しかし、残念ながらジャマイカではこのような資料的条件を具備した事例は見出されなかった。そこで本研究では、科研費の給付を受けて英領西インドのプランテーション経済について組織的に史料を収集しているブリストル大学附属の「人文・社会科学図書館」での調査研究を企画したのである。

第 2 の課題については、当初より 18・19 世紀端境期に西インドの大プランターで本国では「西インド」派の領袖でもあったジョン・フォスター・バラム John Foster Burham を研究の主対象として考えていた。かれは「西インド」派の代表者ではあったが、奴隷人口の再生産は適切な待遇を奴隷労働者に供与する (= 「待遇改善」アメリオレーション) ことで達成可能であるとの理解に基づいて、奴隷の生活改善のため様々な提言を行った人物である。かれの議論の基盤には、所有する砂糖プランテーション「メソポタミア」において他に類例のないほど長期にわたってバラム家代々により継続的に作成された奴隷の人口資料がある (リチャード・ダンの先行研究により詳細な調査がなされている)。この膨大なデータは、オックスフォード大学ボドレイアン図書館に収蔵されており、これら奴隷人口データとともに同図書館の「バラム家文書」の全体的調査が、本調査研究のもう一つの目標であった。

3. 研究の方法

本研究の方法上の第一の特徴は、奴隷の人口研究を彼らの労働のあり方とリンケージして分析する方法にある。近世西インド諸島の奴隷労働者は所有主の「動産」(Chattel) と見なされ、本国などの賃金労働者と異なり、その食事や被服、居住などの消費生活は直接プランターの生産費用の一部をなし、その子どもの出生と労働者としての成長、あるいは業務上の労働災害などによる負傷・死亡はプランター資産の増加あるいは毀損として計上された。

このような関係から、労働 = 財の生産 (プロダクション) と子供の出生 (リプロダクション) はプランテーション経営の不可欠の要素であり、それら二要素いずれも奴隷の肉体から発出する。そこでプランテーション経済の分析をより深く掘り下げるためには、これらを連結させて行うのが望ましい。しかしながら、奴隷の日々の労働の記録とともに彼らの出生記録が同じ時期に利用可能である条件を具備したプランテーションを見出すことは、資料的制約の大きな西イン

ド諸島については、実際容易ではない。今回の調査研究プロジェクトにおいてもこの条件を満たした事例としては、結局唯一ピニー家所有のモントラヴァーズ農園 Mountravers Estate(ネイヴィス島 Isle of Nevis)のみを見出すことができたただけであった。他方パラム家所有の「メソポタミア」農園は、上述のように稀有の奴隷人口資料を有するものの、日々の農園業務の実際が詳細にわかる資料は見出すことができなかった。そこで、当面上記二つの課題のうち第一の年間業務の流れと奴隷社会における出生と死亡の推移との連関への取り組みを優先し、第二の課題である奴隷の出生と農園生産活動の維持のためプランターがどのように思考しまたどのような対策を実施したかについては、今後時間をかけて取り組むこととした。

4. 研究成果

上記モントラヴァーズ農園関連資料は、ブリストル大学附属「人文・社会科学図書館」階上の「特殊文庫」Special Collections に所蔵されている。18世紀末当時当農園はピニー家の当主ジョン John Pinney の所有化にあり、主に彼の管理の下で作成された二種類の文書が、本研究の調査対象である。

第一は「奴隷登録簿」Inventory of Slaves で、その時々プランテーションに在住する奴隷をアルファベット順に列挙したもので、確認できた限りでは1767年の分および1783年から1801年までの間について1ないし4年間隔で計8回分のデータが利用可能である。当農園で出生した者についてはその出生時が記されており、当該期間の出生記録として利用可能である。

今一つは「プランテーション業務日録」Plantation Occurrences で、業務日ごとに農園の各業務にそれぞれ動員された奴隷数が記されている。期間は、「特殊文庫」のカタログ上では1798年1月から1801年7月までとされているが、多くの頁が欠損・汚損しており実際に吟味した限りでは組織的分析に耐えられるのは、1798・1799の2年間程度である。大変に短い期間ではあるが、この農園については同じ期間に出生データと労働データとが利用可能なので、それらの史料連結を実施できる。

「奴隷登録簿」からは、当該時期の当農園の奴隷数は200名程度であり資料上3グループに分類されていることが分かる。第1は、先代農園主ジョン・フレデリック1世期より農園で使役されていた者およびその子孫(G1とする)。第2は、ジョン・ピニー当主時に購入または農園で出生した者(G2とする)。第3は、1795年にジョンが息ジョン・フレデリック2世に農園を譲与した際G2からジョンがとくに選別し自身の手元に留め置いた者(G3とする)。つまり古参集団(G1)と新参集団(G2・3)とに大別できる。

古参グループは、もっぱらサトウキビ農場での農作業と製糖所での粗糖・ラム酒製造などに従事し、新参集団はおもに農園内施設の新設・補修(大工・石工などとして)や補助的仕事(仕立て職人・料理人などとして)に従事したほか農園外への出稼ぎ仕事 hiring out に就いたが、とくに農繁期には古参集団の補充人員として農場や製糖所作業にも数十名規模で動員された。

奴隷社会の階層観念においては、最も過酷で自由のない農場仕事に従事する者 field workers が最も下層で、より肉体的負担が低く時間的自由がある職人仕事や出稼ぎなどに従事することは「特権」と考えられ、彼らは上層を占める。また新参者よりも古参者が上位を占めるべしという意識も強かった。これに対しモントラヴァーズ農園の奴隷社会では、上記のように新参集団が「特権」を享受する形になっており、この矛盾が社会的緊張を招いていたと考えられる。

砂糖プランテーションでは夏秋期にはサトウキビの作付けで、また冬春期には収穫と製糖で、それぞれ繁忙期とされるが、「プランテーション業務日録」を見ると動員奴隷数の推移においては明確な季節的変動パターンは見出しにくい。これは第一に、サトウキビ栽培動員の季節的变化に対しそれを相殺するような季節的变化を製糖所への動員が示すこと、および第二に農場仕事や製糖に直接かかわらない様々な仕事への動員が常時3割程度を占めているためである。

そこで、農園労働の季節的変化リズムを基本的に生み出しているとみられるサトウキビ栽培労働に着目する。この業務へのもっとも集中的な動員がなされたのは、9月初旬から2か月間である。そして「奴隷登録簿」の出生データをこれに重ねると、確かに冬春期の出生は他の時季よりも高めであることは確かだが、9月からの最繁忙期については目立った低下は見出されない。それ故に、農場業務の季節的変動に連動して奴隷の出生は調整される傾向があるとのテーゼは、精査が必要である。

二つのポイントが考えられる。まず奴隷が自らの意思でそのタイミングを決定できるのは、子の出生ではなく男女のカップリングである。妊娠期間を10か月余りと見なせば、出生数の年間変動パターンを2か月余り先送りすればカップリングのそれを見出すことができる。また奴隷の集団間で、このカップリングの季節的変動の明確さに違いがあることも考えられる。

カップリング数は、晩秋の農場への集中動員が終了するタイミングで上昇し始め、初夏に集中動員が増え始める時期に減少する傾向があることが分かった。またカップリング数のこの変動パターンは、G1グループにおいてはあまり明確ではないが、G2・3グループでは明確である。もっぱら農場業務に従事するG1よりも、主に非農場仕事に就くG2・3において集中動員の時期にカップリングを忌避する傾向が見られたのは、意外である。それを推察するに、日ごろ主業務を農場仕事以外に有する彼らの間には「特権」意識が醸成されており、集中動員期に農場仕事に動員されることは肉体的苦痛のみならず精神的にも屈辱的な経験であり、その耐え難さがこの時期のカップリングの低下に現れていると見做すことができよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

| | |
|----------------------|-----------------|
| 1. 著者名 井上 孝、和田 光平 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 原書房 | 5. 総ページ数 272 |
| 3. 書名 自然災害と人口 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

| |
|---|
| <p>ブリストル大学附属人文社会科学図書館における研究調査結果について、現在研究論文を執筆中である。今年度中には日本国内のいずれかの学会誌に投稿・発表する予定で準備を進めている。</p> |
|---|

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| | |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|